

## 2004年よりミャンマーで海藻養殖を行う

大野正夫



現在、厳しい軍事政権下におかれ悲惨な生活を強いられているミャンマ国民は、古い歴史を持つ仏教国で多民族国家である（左図）。1945年日本軍の支配から独立国ビルマ国となったミャンマは、復興が著しく、東南アジア諸国の中では豊かな国であった。しかし多民族から形成された国であることから、政変と民族間の抗争が繰り返された。

1988年に9月18日にソウ・マウン国軍最高司令官率いる軍部が、クーデターで政権を掌握了。

ビルマ独立を果たし多くの国民から尊敬された父を持つ民主化の指導者アウンサン・スー・チーら

は、国民民主連盟（NLD）を結党して民主主義回復闘争をした。アウンサンスー・チーは、選挙前、1989年に自宅軟禁された。以後、ほぼ20年間の長い軍政国家となった。

しかしミャンマー軍事政権下でも、権威国家ではなく、国会・行政を軍人が握っていたが、民間人も議員になれた議会制度は継続していた。

2010年11月には議会で採択された新憲法に基づく総選挙が実施され、総選挙終了後にアウンサン・スー・チー女史を党首する10年間は、民主主義国家が維持され、多くの外国から投資が続き、言論の自由が保持され画期的なスピードで経済成長をした。

10年間のアウンサンスー・チー率いる国民民主連盟（NLD）が再登録され、多数派となつた2回目の総選挙後の議会が開かれるはずだった2021年2月1日に、軍部は軍事クーデターを起こし、スー・チー国家顧問を拘束した。ミン・アウン・フランク国軍総司令官が全権を掌握し、軍事政権として国家行政評議会が設置され、再び軍政国家となった。

しかし10年間で民主主義的な考えを持つ者が多くなり、昔の軍政国家を望まず、現在ミャンマー国内は内戦状態が続いている。

スー・チー女史らは、山岳地帯の少数民族の融和政策に失敗したことが、軍部内に軍政国家再起への動きを与えた。現在は山岳少数民族と民主派との融和が進み、国軍との戦いになっている。少数民族の主要な軍資金はコカインである。国軍の後盾は中国である。このような事情で内戦とされており、日本や西側諸国は難しい立場に立たされている。

### 軍政下の2004年よりキリンサイ養殖を開始する

筆者は、軍政下の2004年9月26日にミャンマーに渡った。多くの食品や化粧品に必要粘性成分を持つ寒天に類似のカラギナン原料の海藻キリンサイは、フィリピン、インドネシアで養殖が盛んになったが、温暖化で海水温が上がり、世界的にキリンサイ生産量が減少しつつあった。

カラギナンと寒天生産の業界大手の韓国の会社、MSC 株式会社が、安定的に原料を確保するため自社基金で、ミャンマーでキリンサイ養殖開発する企画を立て、筆者はアドバイザーとして土佐湾で養殖していたキリンサイの種苗を、社長の長男で副社長の金 鐘奭 (Jong Seok Kin) 氏と一緒にミャンマーに持参し、キリンサイ養殖試験を始めた。MSC 株式会社は、1 年まえより事前調査で養殖海域を決め、養殖作業、倉庫、トイレなどの建物出来ていた。

キリンサイ養殖海域は、上記の地図の下方先端部（タイ国境に接する）の多くの島々があるところであった。ミャンマーの広い湾は雨量が多い地域で塩分が低く、キリンサイ養殖には適さない。最下方のミャンマー先端の海域が良い。これら島々の渡航港で、中核都市として、ベイ（Bay）という街がある。飛行場や大学もある。中核都市と言っても、高い建物はなく、中央を走る幹線道路をオートバイで 20 分走れば、郊外となる。



養殖場に持ちこむ資材

Bayの波止場、木造船の島廻り船へ乗船する



他島への渡し船を見送る

マングローブ林をみつつ目的の島へ向かう



キリンサイ養殖作業場、食堂とトイレ ロープに括るキリンサイ種苗



2か月後に収穫するキリンサイ葉体

収穫されたキリンサイ葉体



乾燥したキリンサイの雑物除去作業

作業をする若い女性達

キリンサイ養殖場は、Bay の港から、渡し船で 2 時間くらい沖のマングロープ林がない小島で、山からの水があり、広い砂浜のある所であった。すでに作業場、倉庫、食堂、トイレが建てられていた。キリンサイの養殖は順調であり、手のひらほどの葉体をロープに括りつけると 2 か月で、収穫できる大きさになった。先端の葉体をちぎって、新たなロープに括りつける簡単な養殖で、養殖は順調に進み 1 年後には、韓国へ輸出されるようになった。

自社の渡し船も建造されて、1時間で養殖場の島に行けるようになり、日帰り日課である。作業は比較的に楽であり日当も良かった。若い女性は陸上作業、男性は主に海面養殖をしたが、20名ほどの作業員が集まつた。筆者のミヤンマー一行は、4回で終わつた。今回のクーデターが起きるまでは、MSC社のキリンサイ養殖は続けられていたが、現在は閉鎖しているという情報を得ている。

### 2007年 再度ミヤンマーに行く

MSC株式会社で、キリンサイ養殖が順調に生産されていたので、Bay周辺海域の島々でエビの収穫と加工、養殖魚ハタハタの加工を行う地域の大手会社から、日本ミヤンマー交流協会へ共同事業が申しこまれた。日本ミヤンマー交流協会は共同出資で、キリンサイ養殖することを承諾して、筆者はキリンサイ養殖アドバイザーを引き受けた。

再び2007年に、高知からキリンサイの種苗を持参し、高知大学矢野の誠技官と教え子で国立国際農業研究センターの筒井功博士と3人で、ミヤンマーに向かつた。今回は、潮流が速い二つの島が接する海域をキリンサイ養殖場とする作業から始まつた。エビ養殖工場のある島は、Bayの港から大型フェリーで5時間ほど掛かり、無線連絡でフェリーが到着すると、迎えの高速艇が迎えにきた。工場がある島には、大きな加工場、冷凍棟が立ち並び、200名以上の作業員がおり、多くは家族生活をしていた。島内に雑貨店、野菜、魚や肉を売る店もあり村になつていていた。ホテル並みの来客用（エアコン付き）の家が5棟あった。来客用食堂もあった。島には、会社雇い軍隊を持っていた。この海域は武装強盗団がおり無法海域であった。波頭には武装した兵士が2名が常駐していた。



会社で記念写真、左端：協会事務局長、中央筆者、右社長。左写真：自動小銃を持った雇兵士



左写真：養殖場海域を探す 右写真：養殖されたキリサイを持つ筆者

共同事業となった会社は、Kyaw Kyaw Phoyo Co.,LTD (KKP)で、社長は Mr.U Tin Maung Latt 氏で Bay 市内に居るが、最初の養殖場探しには同行した。日本ミャンマー交流協会の事務局長の Daw Su Su Oung 女史も同行した。Su Su さんは、独立後の民主政権の政府高官の娘で、軍事クーデーで小学生の頃に家族とともに日本に亡命して、長く日本で過ごした。彼女は容姿は日本人と変わらず、日本語を話し日本語の読み書きも出来る。日本人の仲間を集めて、日本ミャンマー交流協会を起こした。今回は通訳を兼ねて島に同行した。

共同事業は順調に進み、1年後には、大きく伸びたキリンサをみることができた。広い高床の干場もでき、コンクリート造りの貯蔵庫もみたが、KKP から、収支報告がなく、黒字にならないという報告が続いた。日本へ輸出されてはいるが、人件費や設備費への投資の回収が済んでいないので、協会への支払いがないままに、2020 年の再度のクーデターで、日本ミャンマー交流協会との連絡も途絶えた。

2022 年の FAO の世界のキリンサイの生産額に、ミャンマーは 200 トン（乾燥重量）と記載されていた。キリンサイ関係の日本の商社に問い合わせると、国軍の兵士がキリンサイ養殖をしているようだと回答があった。

KKP の社長は、民主化した政権で国会議員になったと Su Su さんから連絡が届いていた。クーデターで会社は軍に没収されたのであろう。キリンサイが引き続き養殖されており安堵している。

私がミャンマーに行った頃の軍事政権下では、行政のトップクラスや国立大学長は軍人であったが、彼等は軍服を着ていず、ラフな服装であった。民間企業の運営も国際的に正常に機能していた。KKP のように強盗団の対策で、会社経費で、武器を持つ兵士（私兵と呼んでいた）達を雇用する会社があるほど軍部と民間の関係であった。Su Su さんに亡命した人達が、舞い戻って国際的な事業をしていた。今のミャンマーの言論弾圧や軍の横暴の後盾には、中国政権の陰がみえてくる。街や抵抗勢力拠点に、新鋭の戦闘機で空爆できる軍費など、国軍にはあるはずがない。